

『源氏物語』の戸締まり具の解釈

—空間表現への視座から—

金 秀 美

1. 問題の所在

『源氏物語』では、「じやう」（一例）、「かけがね」（三例）、「さすがね」（一例）、「かぎ」（二例）という戸締まり具の名が僅かに見える。

【表1】を見ると、これらの戸締まり具は、訪問、侵入、垣間見といった、物語において登場人物の位置が問題視される場面に主に登場している。又、その戸締まり具の位置を確認すると、本文（1）の「じやう」と（2）（3）の

【表1】 本文	位置
（1）これより外の男はたなきなるべし、ごほごと引きて「 <u>じやう</u> のいいたく錆びにければ開かず」と愁ふるをあはれときこしめす。（朝顔巻p481） ¹	西の門
（2）御車入るべき門は <u>錆したりければ</u> 、人して惟光召させて、待たせたまひけるほど、……門あけて惟光朝臣出で来たるして奉らす。（惟光）「 <u>かぎ</u> を置きまどはしはべりて、いと不便なるわざなりや。……」とかしこまり申す（夕顔巻p135～137）	門
（3）御車出づべき門はまだ開けざりければ、 <u>かぎ</u> の預り尋ね出でたれば、翁のいといみじそ出で来たる。（末摘花巻p296）	門
（4）みな静まりたるけはひなれば、 <u>かけがね</u> をこころみに引きあげたまへれば、あなたよりは <u>錆さざりけり</u> 。（帚木巻p98）	中の障子
（5）……こなたに通ふ障子の端の方に、 <u>かけがね</u> したる所に、穴のすこしあきたるを見おきたまへりければ、外に立てたる屏風をひきやりて見たまふ。（椎本巻p216）	西面と西廂の障子
（6）うち見るごとに涙のとめがたき心地するを、まいて心かけたまはん男は、いかに見たてまつりたまはんと思ひて、さるべきをりにやありけむ、障子の <u>かけがね</u> のもとにあきたる穴を教へて、紛るべき几帳など引きやりたり。（手習巻p351）	障子
（7）……御身は入りはてたまへれど、御衣の裾の残りて、障子はあなたより <u>錆すべき方なかりければ</u> 、ひき開てさして、水のやうにわななきおはす。人々もあきれて、いかにすべき事ともえ思ひ得ず、こなたよりこそ <u>さすがね</u> などもあれ、いとわりなくて……（夕霧巻p405～406）	西面と北廂の間の障子

「かぎ」は門と関わって描かれており、(4)～(7)の「かけがね」「さすがね」は障子に付けられていることが分かる。しかし、これらの僅少な用例のみでは、「じやう」と「かけがね」が明確に区分されていたか判定しがたい。

そこで次に、動詞で戸締まりしたことを示す用例を見てみよう。次の【表2】は、動詞の用例(「さす」(16例)、「かたむ」(6例：名詞「かため」の場合も含む)、「さしかたむ」(2例))を列挙したものである。それを見ると、「さす」という語は、門、格子、遣戸、障子等といった幅広い建具の施錠を表現する時に使用されている。又、本文(2)(4)の例のように、この語は「かけがね」「さすがね」の時に使われており、『源氏物語』ではその用例が見えないが、『落窪物語』では「じやう」を下ろした時にも用いられている。即ち、この「さす」という語のみでは、施錠した戸締まり具がどれなのか、その位置はどこなのか、判断することができず、現代の諸注においても多様に解釈されている。

【表2】 本文	位置
(8) この子も幼きをいかならむと思せど、さのみもえ思しのどむまじりければ、さりげなき姿にて、 <u>門など鎖さぬ</u> さきにと急ぎおはす。(空蟬巻p118)	門
(9) この入りつる <u>格子はまだ鎖さねば</u> 、隙見ゆるに寄りて西ざまに見通したまへば、この際に立てたる屏風端の方おし置まれたるに、紛るべき几帳なども、暑ければにや、うちかけて、いとよく見入れらる。(空蟬巻p119)	南の隅の間の格子
(10) (女房)「若君はいづくにおはしますならむ。 <u>この御格子は鎖してん</u> 」とて鳴らすなり(空蟬巻p123)	南の隅の格子
(11) (末摘花)「答へきこえて、ただ聞けとあらば、① <u>格子など鎖してはありなむ</u> 」とのたまふ。(命婦)「簀子などは便なうはべりなむ。おしたちてあはあはしき御心などは、よも」などいとよく言ひなして、②二間の際なる <u>障子手づからいと強く鎖して</u> 、御褥うち置きひきつくろふ。(末摘花巻p281)	①廂と簀子の格子 ②母屋と廂の障子
(12) ……もしさりぬべき隙もやあると、藤壺わたりをわりなう忍びてうかがひ歩けど、語らふべき <u>戸口も鎖してければ</u> 、うち嘆きて、なほあらじに、弘徽殿の細殿に立ち寄りたまへば、人少ななるけはひなり。(花宴巻p356)	局の戸口
(13) ……水鶏のうちたたきたるは、 <u>誰が門さして</u> 、とあはれにおほゆ。(明石巻p241)	門
(14) 何心もなくうちとけてみたりけるを、かうものおぼえぬに、いとわりなくて、近かりける曹司の内に入りて、 <u>いかで固めけるにかいと強きを</u> 、しひてもおし立ちたまはぬさまなり。(明石巻p257)	曹司[障子]
(15) 物まゐりなどしたまへど、さらにまゐらで、寝たまひぬるやうなれど、心もそろにて、人しづまるほどに、中障子を引けど、例はことに <u>鎖し固めなどもせぬを</u> 、	中障子

つと鎖して、人の音もせず。(少女巻p48)	
(16) 東の対なりけり。辰巳の方の廂に据ゑたてまつりて、 <u>御障子のしりは固めたれば</u> 、(源氏)「いと若やかなる心地もするかな。……」と恨みきこえたまふ。(若菜上巻pp80～81)	母屋と廂の障子
(17) (夕霧)「こは、など。 <u>かく鎖し固めたる</u> 。あな埋れや。今宵の月を見ぬ里もありけり」とうめきたまふ。(横笛巻p358)	廂と簀子の格子
(18) (小少将)「 <u>障子は鎖してなむ</u> 」と、よろづによろしきやうに聞こえませど、…(夕霧巻pp419～420)	北廂と西面の障子
(19) (小少将)「……ありのままに聞こえさせて、 <u>御障子の固めばかりをなむ</u> 、すこし事添へて、けざやかに聞こえさせつる。……」と申す。(夕霧巻pp421～422)	北廂と西面の障子
(20) 宮はいと心憂く、情なくあはつけき人の心なりけりとねたくつらければ、若々しきやうには言ひ騒ぐともと思して、塗籠に御座一つ敷かせたまて、 <u>内より鎖して大殿籠りにけり</u> 。これもいつまでにかは。(夕霧巻p467)	北廂と西面の障子
(21) ……かの入りたまふべき道にはあらぬ廂の <u>障子をいとよく鎖して</u> 、対面したまへり。…(薫)「…この障子の固めばかりいと強きも、まことにもの清く推しはかりきこゆる人もはべらじ。……」(総角巻pp263～266)	西廂と西面の障子
(22) 人憎く、け遠くはもて離れぬものから、 <u>障子の固めもいと強し</u> 。しひて破らむをば、つらくいみじからむ、と思したれば、……(総角巻p288)	西廂と西面の障子
23) (宿直人)「家の辰巳の隅の崩れいと危し。この、人の御車入るべくは、引き入れて <u>御門鎖してよ</u> 。かかる、人の供人こそ、心はうたてあれ」など言ひあへるも、むくむくしく聞きならはぬ心地したまふ。(東屋巻p91)	門
(24) <u>遣戸といふもの鎖して</u> 、いささか開けたれば、(薫)「飛ぶ驛の工匠も恨めしき隔てかな。かかる物の外には、まだるなはず」と愁へたまひて、いかがしたまひけん、入りたまひぬ。(東屋巻p92)	母屋と南面の遣戸

例えば、(11)の場面において、末摘花は母屋と廂の間にある障子を「手づからいと強く鎖して」源氏と対面するが、その記述について、『玉上評釈』『完訳』『新全集』『新大系』等の大体の注釈は、「襖に自分で嚴重に錠をおろして」と解するが、田島智子氏はここの施錠具を「掛け金」と把握している^②。又、(21)の箇所においても、『全書』『完訳』『全集』『新全集』は「錠」と訳する反面、『集成』『玉上評釈』『新大系』は「鍵」、増田繁夫氏は「掛け金」と解している^③。このように、諸注釈の中で、「さす」という語は、「じやう」にも「かけがね」にも「かぎ」にも解釈されており、それらの施錠具の差やそれを採択した根拠については、まだ明確に提示されてこなかった。

これらの戸締まり具を単なる開閉に関わる装置として考えると、その構造と

用途の差はあまり意識しなくてもよいかもしれない。しかし、これらの例が登場人物の微妙な位置を描く場面で門や建具等と共に描かれていることを考えると、物語における戸締まり具の解釈と作用にも十分注意を払う必要があるのではなかろうか。

本発表では、物語における戸締まり具の解釈の問題を取り上げ、それが登場人物の位置と空間の問題とも密接に関わっていることに注目し、物語の空間表現の側面から論じてみたい。

2. 戸締まり具の名称と構造

では、当時の戸締まり具の実態を把握するため、『和名抄』『類聚名義抄』の古辞書類に見える施錠具の名称と種類を確認してみたい。

『十卷本和名抄』（元和古活字那波道圓本）「門戸具」^④

錠 功程式云舉錠（阿介賀須加比今案錠字本文未詳）

鑰 四聲字苑云鑰（音藥字亦作闔今案俗人印鑰之處用鑑字非也鑑音溢見唐韻）關具也楊氏漢語抄云鑰匙（門乃加岐）

鉤匙 楊氏漢語抄云鉤匙（戸乃加岐一云加良加岐鉤音古侯反）

鎖子 唐韻云鎖（蘓果反俗鎖子）鍊鎖也楊氏漢語抄云鎖子（藏乃賀岐辨色立成云櫬鑰）

『観智院本類聚名義抄』（僧上 八十八金）^⑤

鉤鉤 （今正 古隻反 カキカクコ簾— カカテル カ、フ テカル ス
ミカキ サクル クサリツリカコ）鉤匙（トノカキ一云カラカ
キ）

錠 （未詳 カスカヒ アケカスカヒ） 舉— （アケカスカヒ）

鑰（ヤトノカキ カキ） 鑰匙（門ノカキ） 鎖鑑（カキ）

鎖鎖鎖鎖（次ニ正下俗音瑯 カナツカリ クサリ（ル）ツラスク カ、
ル カナクサリ …… カキ コメタリ ……）

鎖子（藏ノカキ カナキ 是カシ カナツカリ クサリ カナクサリ

『和名抄』を見ると、様々な施錠具の名が見えるが、波線部のように、鑰子・鑰は蔵のカギ、鉤匙は戸のカギ、錠（鑰）は門のカギというふうに、それが付けられる位置によって区分されている。更に、そのような説明の仕方は『類聚名義抄』『色葉字類抄』等、以後の古辞書類にも同様に継承される。しかし、近年に至って、宮原武夫氏^⑥や合田芳正氏^⑦により、『和名抄』の施錠具の説明に対する批判が提議されている。

・宮原武夫…要するに、鑰子は、金属製の錠であり、鉤匙は、錠の鍵であり、錠は、クルルまたはカンヌキを操作するカギである。『和名抄』は、これらの三つのカギをその構造を無視して、それぞれの蔵のカギ、戸のカギ、門のカギと固定的に区別しようとしたところに誤りがあった。

即ち、宮原氏は施錠具の実物の形状の差を指摘し、それによって分類しており、このような宮原氏の見解は、以後合田氏の調査によって更に追認されている。合田氏は古文書や考古学的遺跡を検討した上で、確定的ではないが、鑰子は厨子、櫃、蔵等に取り付けられるものであり、錠は倉の内側や門の外側に付けられるものであるというふうに、戸締まり具の種類やその形状の差によって、施錠対象がある程度選択されていたと結論づける。即ち、個々の施錠具を単に位置によって区分する『和名抄』の説明とは異なり、両氏は、施錠具の種類とその構造を認識し、それらの差によって施錠対象と機能を把握しているのである。

では、『源氏物語』をはじめ、中古物語に見える「じやう」「かけがね」は、どういう具であったのだろうか。

まず「じやう」は、宮原氏が「錠」(Lock)と指摘した「鑰」「鑰子」と同様のものと見られる。本居宣長は、『万葉集』の穂積親王の歌に見える「鎖(鑰)」について、「故_レ今本に邪^サ一^ウ字と訓を付たり、されど、師は右の廿ノ巻の哥に依て久岐と訓れき」と、その昔の訓が「ザウ」であったと指摘する^⑧。「鎖」の訓は、寛永本では「サラ」となっているが、古葉略類聚鈔、細井本、神田本、

温故堂本、大矢本等は「サウ」、西本願寺本、万葉代匠記初稿本は「ザウ」となっており、万葉考は「クギ」、万葉童蒙抄はクロとする等、諸説がある^⑨。このように、『万葉集』の諸注釈の大半が「鎖」の音が「サ」「サウ」であって、「じやう」という音が見えない点に関して、『古語大辞典』（小学館）の「じやう」の〔語誌〕では、「色葉字類抄などにしたがって、『鎖（鎖と同字）または鎖を当てべきであろう。しかし、この両字の音はサであって、ジャウの音がない点に問題が残る」と、「じやう」という語に「鎖・錠」の漢字を当てながらも、その音に疑問を呈している^⑩。しかし、『日本国語大辞典』の「じょう」の補注のところに、「『鎖（鎖）』をサウとよんだ例があるところから、ジャウはこのサウ（ザウ）の変化したものかといわれる」と「鎖」という漢字の音の変化を指摘している^⑪ように、「鎖（鎖）」を「じやう」と同一のものと把握する見方もある。明確な根拠は見出し難いが、今は宮原氏の所説に従い、物語に見える「じやう」を「鎖（鎖）」（サ・サウ）と同様のものと見ておこう。

それに対して、「かけがね」は、『和名抄』等の古辞書類にその名称が見えず、初出も平安中期成立の『枕草子』になっている。しかし、『和名抄』『類聚名義抄』等が未詳とする「錠」（二重傍線部）について、契沖が「催馬楽に、かすがひとへるは、世にいふかけかねなり」（『圓殊庵雜記』）^⑫と指摘するとく、「錠」は平安朝物語に見える「かけがね」と同一のものと推定される。更に、『筆の御霊』（卷之八）を見ると、「思にあげかすがひは、今の棹かきかね也、持あげてはづす物なれば、然いへる也」^⑬と説明するように、「錠」「かけがね」とは、一方を金物の穴に掛けて締めるとする鎖、又は鉤のような簡単な形であったと見られる。即ち、「錠」「かけがね」は、「じやう」と異なって、宮原氏が指摘した錠（鑰）のように、錠前（Lock）と鍵（Key）の機能が分離されていないものと見られる。

このように、『源氏物語』に出てくる「じやう」と「かけがね」が異なる構造を有する施錠具であることは、その施錠具の用途の把握に局限せず、『源氏物語』をはじめ、中古物語における戸締め具の解釈やその空間表現を理解す

るのにも、重要な示唆を与えるものと考えられる。

3. 中古物語における戸締まり具

先述したように、『源氏物語』における戸締まり具の用例はごく僅かであるが、平安物語には「じやう」「かけがね」の用例は多数出ており、その実態の片端を確認することができる。

じやうの用例

『うつほ物語』

- ①おそろしと見つゝ、なをうちよりて見たまへば、よになくいかめしき^(錠カ)上かけたり。…かぎなればあくべきたばかりをしつゝ、くらをあけさせ給。さらにあかず。(蔵開上p922~927)^⑭
- ②しらたておほひしたるからびつ二よろひ、じやうさしてかぎゆひつかけたり。(蔵開下p1219)

『落窪物語』

- ①枢戸の廂二間ある部屋の酢、酒、魚など、まさなくしたる部屋の、ただ置一枚、口のもとにうち敷きて、…いと荒らかに押し入れて、手づからつい鎖して、錠^(カ)強くさして往ぬ。(p104)^⑮
- ②北の方、鍵を典薬に取らせて、「人の寝静まりたらむ時に入りたまへ」とて、寝たまひぬ。皆人々静まりぬる折に、典薬、鍵を取りて来て、さしたる戸あく。(pp132~133)

「かけがね」(かきがね)の用例

『枕草子』 東の対の西の廂、北かけてあるに北の障子に、かけがねもなかりけるを、それもたづねず。(p35)^⑯

『浜松中納言物語』 「まことに、かきがねの穴をさへふたぎて、うちもいと多く、宿直人だつ人集まりてなむある」(p72)^⑰

『狭衣物語』 ここかしこ、紛れ歩きたまひて、心安き掛金にやありけん、放

ちおきたまひけるを、知る人もなし。(p177)¹⁸

『今昔物語集』一時許有テ、皆人寝ヌル音為ル程ニ、内ヨリ人ノ音シテ来テ、
(a) 遣戸ノ^{かけがね}懸金ヲ窃ニ放。平中、喜サニ寄テ遣戸ヲ引ケバ、安ラカニ開ヌ。
…女ノ云フ様、「極キ物忘レヲコソシテケレ。(b) 隔ノ御〔障〕子ノ懸金ヲ
不懸デ来ニケル。行テ、彼レ懸テ来ム」ト云ヘバ、平中、現ニト思テ、「然
ハ、疾ク御マセ」ト云ヘバ、女起テ、上ニ着タル衣ヲバ脱置テ、単衣・袴許
ヲ着テ行ヌ。(pp373～374)¹⁹

『うつほ物語』①は、仲忠が京極の旧邸で不思議な蔵を発見する場面である。
その蔵には頑丈な「じやう」が設置されており、「かぎ」なければあくべきたば
かりをしつゝ」のように、「かぎ」がなくて開錠に苦心する様子が記されてい
る。又、②近江守が兼雅夫妻に唐櫃を献上する際にも、「じやう」と「かぎ」
と一緒に渡されている。即ち、「じやう」は、両氏が指摘した「鎖（鎖）」と同
様、門、蔵、櫃、厨子に付けられ、「かぎ」によって開閉されるものになって
おり、そのような「じやう」の性格は、『落窪物語』の用例からも確認するこ
とができる。

次に、中古物語における「かけがね」（かきがね）の用例を見ると、『浜松中
納言物語』では、門の施錠具として「かきがね」が出てくるが、物語の中で
「じやう」が建築内部の戸締まり具として用いられる例は殆ど見られないのに
対して、「かけがね」は、障子、中障子、遣戸という建築内部の戸締まり具と
して多く点描されている。

『枕草子』の用例を見ると、大進生昌の家の東対の北の障子に「かけがね」
もなかったと書かれている。それは、元々北廂と母屋の間の障子には「かけが
ね」が付けられることがより一般的であることを示すものであろう。『狭衣物
語』の例は、狭衣が嵯峨院で女二宮のいる御堂に侵入する場面であるが、妻戸
に取り付けられた「掛金」（傍線部）は、若宮の手により簡単に開錠されてし
まう。このように、「かぎ」を必要とする「じやう」とは異なって、「かけがね」
はより簡単に操作できるものであった。

このように、中古物語における「じやう」「かけがね」は、両氏が指摘するように、異なる構造を有していることを確認される。更に、その戸締まり具の構造の差というのは、単なるその具が付けられる位置や機能が異なることに止まらず、物語における登場人物の位境や空間表現を巡って様々な意味を派生していく。「じやう」は、その開閉に鍵を必要とする施錠具であるがゆえ、鍵を持つ人こそがその空間内の人・物を所有・管理することになる。それに比べて、「かけがね」は鍵を必要とせず、そこに接近することによって開錠するものであり、その戸締まり具の内側にいてそれに接近できる人であれば、自分の防御や自由な移動が可能になるのである。このような「じやう」と「かけがね」の特徴を生かして物語に有効に取り入れているのが、『落窪物語』、『今昔物語集』の例である。

『落窪物語』の落窪の姫君は、元々「寝殿の放出の、また一間なる落窪なる所の、二間」(一七頁)に住んでいたが、帯刀と関係しているという継母の讒言により、物置のような「柙戸の廂二間ある部屋」に幽閉されてしまう。継母はその部屋の戸を「じやう」で施錠し、「かぎ」を自分が持っているながら、典薬助に「かぎ」を渡して姫君を襲うように計らう。即ち、ここでは「かぎ」を持つ人物、継母が姫君や彼女の空間を管理することになる。「かぎ」を持っていないあてきや少将は、姫君がいる部屋に接近しても「じやう」を開けることはできず、結局少将は「じやう」を壊して姫君を救出するのである。このように、この物語における「じやう」は、継母の手中から少将により救出される落窪の姫君の位境を象徴的に物語るものとして印象的に描き出されているといえよう。

それに対して、『今昔物語集』「卷第三十平定文仮借本院侍従語第一」に見える「かけがね」は、「じやう」とは異なる空間表現を作り出す。この話は、平定文(通称平中)が本院侍従に懸想をし、彼女の居所に侵入する内容であるが、ここでは二つの「懸金」が登場する。(a)は、平中が侵入する際に出てくる遣戸の「懸金」であり、(b)は、侍従が逃げ出す時に登場する母屋の障子の「懸

金」である。特に、ここでは (b) の描き方に注意してみよう。とうとう侍従の所に侵入した平中は彼女を捕まえるが、侍従は障子に「懸金」をかけるべきだと口実を作り、逃げ隠れる。侍従が平中に言った (b)「懸金」は、二人がいる空間の内側のもので、他人がその部屋の中に入ることを防ぎ、安心して二人だけでの時空を作るためのものである。しかし、侍従はその障子を開け、隣の部屋に入って、向こうの障子の「懸金」を施錠して逃げ出す。その「懸金」は、平中の更なる侵入を防御するものである。即ち、ここでの「かけがね」は、平中と侍従という人物の位置、方向、移動などと敏感に関わっており、物語の展開と密接に連動しているといえよう。

一節では、『源氏物語』の「さす」という語を、諸注釈が「じやう」とも「かけがね」とも意識せず解釈する様相を指摘した。しかし、以上見てきたように、「じやう」と「かけがね」が齎す空間表現の差を「さす」の解釈や本文の読みにも反映させるべきではなかろうか。

4. 「さす」という語の解釈

では、『源氏物語』の具体的な場面を取り上げて戸締まりの表現について検討してみたい。【表2】(15)は、夕霧が三条邸の外祖母大宮のもとで、雲居雁と母屋の中障子を隔てて一夜を過ごす場面である。その障子は普段は戸締まりをしないままであったが、内大臣が夕霧と雲居雁との仲を察知した後、「つと鎖して」の状態になっているのである。

この戸締まり具は、『玉上評釈』が「鍵」、『大系』が「掛け金」、『集成』『新大系』が「錠」と解釈する。又、『完訳』『全集』『新全集』は、頭注に「二つの部屋の仕切りをしている襖障子。掛け金がついている」と説明しながらも、現代語訳では「錠」と解する等、矛盾を見せている。特に、『集成』『完訳』『全集』『新全集』の場合、「つと鎖して」の「つと」を「しっかりと」と訳し、錠を下ろして厳重な戸締まりをしたと解している。しかし、この「つと」は、「突然、急に」という意をも有しているように、今までとは異なって施錠した

ことをさすものとして解釈してもよいのではなかろうか。当時の物語の中で、建築内部の中障子に「錠」が付けられた例は、管見の限り見当たらない。又、錠を下ろすためには、その戸に打ち付けた「うちたて」という金具を必要とする。ここは大宮の三条邸であり、夕霧と雲居雁という両者の祖母であった彼女が二人の關係に好意的であったことを考えると、障子に「じやう」を設置したと解するのは、やや無理ではなかろうか。帚木巻の源氏が空蟬の所へ侵入する場面や『今昔物語集』の「卷第三十平定文仮借本院侍従語第一」にも、中障子の施錠具として「かけがね」が描かれており、ここの施錠具はやはり「かけがね」と見るべきであろう。

もし、ここの戸締まり具が「じやう」であるならば、鍵を持っているはずの内大臣（もしくは大宮）がその空間にいる人を管理することとなり、内大臣の許可なしには、中障子を壊さない限り、二人はその隔てを越えて会うことはできない。しかし、当該場面の戸締まり具が「かけがね」であることは、二人の気持ちを通じ合っている場合、両側の移動を完全に遮断することができず、片方によってこの戸締まり具は簡単に開錠される。即ち、このような流動的な戸締まり具は、人物の位置、移動を微妙なレベルに関わって、機会によって物語の状況が反転するかもしれない余地と緊張感を与えるものと言えよう。

＊

＊

＊

平安時代以後、障子が建築内部の仕切りとして用いられていく事実と相まって、その戸締まり具である「かけがね」も、当時の物語に多く登場していく。このような障屏具と戸締まり具は、人物の位置、物語の展開と連動して描かれるものであり、可變的な物語空間を作り出す装置と言えよう。現代に暮らす我々がこのような空間の要素を復元し、理解する作業は、『源氏物語』の物語世界をより正確に解説することへと繋がるのではなかろうか。

[注]

- ①『源氏物語』の引用本文は、阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男校注訳、新編日本古典文学全集『源氏物語①～⑥』（小学館、一九九四～一九九八）に拠る。但し、振り仮名を適宜略し、一部分の漢字表記を平仮名に直している。
- ②田島智子「物語中の屏風・障子」『講座平安文学論究第十三輯』風間書房、一九九八・十。
- ③増田繁夫「源氏物語に描かれた住宅」『源氏物語と貴族社会』（吉川弘文館、二〇〇二・八）。
- ④『諸本集成倭名類聚抄 本文編』（臨川書店、一九六八・七）。
- ⑤『類聚名義抄』（日本古典全集刊行会、一九三八・十）。
- ⑥宮原武夫「不動倉の成立」『日本古代国家と農民』（法政大学出版局、一九七三・七）。
- ⑦合田芳正『考古学ライブラリー66 古代の鍵』（ニュー・サイエンス社、一九九八・五）。
- ⑧『本居宣長全集第三巻古事記傳』（吉川弘文館、一九〇二・十一）。
- ⑨佐佐木信綱編『校本万葉集八』（岩波書店、一九三一・十二）。
- ⑩中田祝夫編『古語大辞典』（小学館、一九八三・十二）。
- ⑪『日本国語大辞典第六巻』（小学館、一九七四・九）。
- ⑫『圓殊庵雜記契沖全集第十五巻』（岩波書店、一九七五・十二）。
- ⑬『筆の御霊巻之八新訂増補 故実叢書第十五』（明治図書出版、一九五二・八）。
- ⑭本文引用は、『宇津保物語本文と索引』（笠間書院、一九七三・三）による。以下、本文引用には、適宜傍線・記号を付した。
- ⑮本文引用は、新編日本古典文学全集『落窪物語・堤中納言物語』（小学館、二〇〇〇・九）による。
- ⑯本文引用は、新編日本古典文学全集『枕草子』（小学館、一九九七・十一）による。
- ⑰本文引用は、新編日本古典文学全集『浜松中納言物語』（小学館、二〇〇一・四）による。
- ⑱本文引用は、新編日本古典文学全集『狭衣物語二』（小学館、二〇〇一・十一）による。
- ⑲本文引用は、新日本古典文学大系『今昔物語集一～五』（岩波書店、一九九六・一～一九九七・七）による。

＊討議要旨

相田満氏から、小さいことが根本に関わるという意味で、示唆に富む発表だったとし、『延喜式』に行政の中で鍵を管理する人がいることが見えるが、鍵をあけることの手続きを経るものと、私的なちょっとしたものととの区別をどう考えるべきかという質問がなされた。発表者は、『落窪物語』などを挙げ、これは錠の位相を表すに有効な例であると考えているとし、鍵を持つ人が、中の人やその空間を管理するという意味を持つという意味があるという考えを示した。さらに、「かけがね」をかけることが空間を作るということを意味することから、物語の展開を促すものであるという見解も示した。江戸英雄氏からは「かけがね」は両方からあけられるものではないという指摘があり、その仕組みを考え、さらに用例を精査していくとよいのではという意見が述べられた。